



おじさんズ通信

2023年10月号 (No.35)

発行元：登別市新生町
桃柿通 緑風舎
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

伝える人々特集

お便り・通信にホッコリと

インターネットの時代であっても、やはり紙のぬくもりとともに何かを伝えたいという人々はいるものです。そこで我が家に届いた「お便り」「通信」のあれこれを紹介し、発信者の思いや願いが詰め込まれたペーパー飛行便。目を通すと、やはりホッコリ、心なごませてくれます。

「猫の事務所通信」

小樽市にある「猫の事務所」が発行しているA3判4つ折りのミニコミ紙。タイトル通り「猫と人間の平和と幸せな共生を願い、また小さな命を救うために少しでもお役に立てたら」と、捨て猫の保護活動や新たな飼い主探しのほか、反戦・平和運動、芸術・文化活動にも猫社員たちとともに奮闘中。



創刊は1999年(平成11年)で、先月発行の紙齢がNo146に。映画好きの心をくすぐる漫画コーナー「高山美香映画館<今日もシネマ日和>」が私のお気に入りです。

自然満載、伊達だより

伊達市を拠点に活動するNPO「森・水・人ネット」と、「だて記念館びおとーぷクラブ」。どちらも同じ代表の下、自然を生かしたマチづくりに躍動中です。

そして両団体に所属する演劇&人生の先輩SさんからNPOの会報のほか、今年8月発行のパンフレット「開拓記念館野草園と旧伊達邸庭園」(A4判8P)が送られてきました。

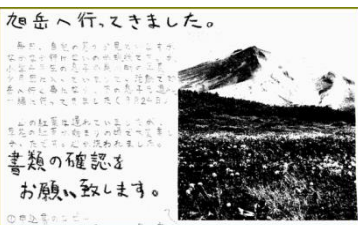


「開拓記念館一」を開くと、2002年から園内にコツコツと植え育ててきた80種超の草や花木のうち、50種以上のカラー写真を満載。主な野草の場所がイラストで紹介されていて、次におじゃまして散策するときの必携ガイド冊子になりました。

東川町農園からの便り

写真甲子園で知られる道北・東川町で無農薬米を栽培し、年間契約で毎月ゆめぴりかを送ってくれている農家さんの四季報「さたけ農園通信」(B4判)。

今月届いた秋号(第24号)には、「旭岳に行ってきました」とのタイトルで、写真少年団の少4の息子さんと、その下の男と子と一緒に9月24日、旭岳登山をした時のレポートを掲載。「山の紅葉は遅れていましたが、草花の紅葉が始まりの頃

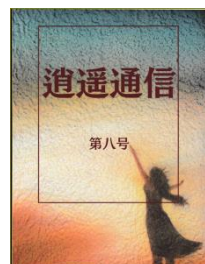


で大変美しかったです。心が洗われました」とのこと。

モノクロが逆に秋の訪れを一層感じさせるヤマと草原の写真は多分、息子さんが撮った一枚でしょう。若い人たちの移住が話題に呼んでいる東川町、他のマチにはない魅力を生み出すプラス・ワンの心遣いが、この手書き通信にもキラリ宿っていました。

「逍遙通信」

小説「ソプフルの丘」で道新文学賞(2018年)を受賞した札幌在住の作家・澤田展人さんが2016年から編集人として年1回発行している文芸誌です。



逍遙なる気楽な誌名とは裏腹に、先月初めて手にした通信の八号を開いてみてちょっとした緊張が…。エッセイ、小説、評論、詩、短歌、書評などに27人もの人々が執筆しております。

定年退職後、精神の不安定から己の行く道を見失い立ち尽くす旅人の心境になったという澤田さん。しかし「このような場所にいる自分に今できることは、誰かにことばを届けることだけだ」と心に決め、個人文芸誌として発行に踏み切ったとのこと。

先月、購読申し込みしてすぐに届いた7、8号。読み終えるに1か月かかりそうなボリュームです。

花から花へ、せわしなく飛び移るミツバチと競い合うかのように、来年用に一とカミさんが家の周りのコスモスの種をせっせと摘んでは紙袋に入れてます。



胸高ほどに育ったオレンジ色のものとは種類が違うのか、今年は赤やピンクのコスモスがぐんぐん成長中で、測ってみると高さは2.5メートルもありました。=左の写真=

「もし地球上からハチが消えたら、人類は4年しか生きられない」とアインシュタインが言ったとか、言わなかったとか。それはさておき、米国・MITの大学院生が1ヘクタールのリンゴの木に人口受粉させると費用はどのくらいかかるか計算したところ、65~81万円との金額が弾き出されました。

一方、ハチによる受粉だと、わずか1万円で済むとか。情報の出どころを確認できませんでしたが、現実的な試算だと、うなずけませんか。

新聞社の隔靴搔痒

地元紙室蘭民報が昨年3月末に、次いで北海道新聞が先月末、夕刊を廃止しました。新聞業界のありがたいトレンドですが、真っ先に思い浮かぶ要因はスマホなどによるネットニュース利用者の増加、イコール購読者の減少ということでしょう。

とはいえ、ネットニュースの記事の配信元は新聞社やテレビ局で、ヤフーニュースには約650社が記事提供しています。

各社がスクラムを組み記事提供しませんーと言いたいところですが、配信料収入もそこそこの魅力のようです。もちろん、ローカル紙も含め、各社自前のニュースサイトを開設していますが、購読料の落ち込みを補う程の利益を得るまでには至ってないのが実情。



【カッカして、靴底を搔く】

業界にとって、いわば靴の底からかゆい所を搔く、隔靴搔痒(かっかそうよう)状態といったところでしょうか。

誰もが納得する解決策を生み出す方がいたら、ノーベル賞ものですぞ。



そうです、題材はミレーの「晩鐘」です。

「パクリアートだ」との指摘もおありでしょうが、これでなにか儲けようという訳でもなし、お許しを。今月、厚紙で作った切り絵や三脚を携えて市内の川上公園へ出かけました。夕陽を狙って行ったのですが、カムイヌプリ(標高750m)の走り根上空は雲に覆われていました。

この1枚は一瞬、切れ間から差し込んだ西日をバックに築山の上から写しました。農夫らの足元の地面は、若山町のキウシト湿原へ続く山裾です。

次は図書館横の落ち葉の絨毯と夕日をキャンバスに「読書する娘」(フラゴナール)の影絵を目論んでいますが、先日、遊びに来た娘に切り絵の実物を見せ「これ、誰だ?」と聞くと「二宮尊徳!」と返ってきてトホホ。まあ、どちらも本を手に行っているし、頭の髪型もチョンマゲに見えなくもありませんが。

薫風 烈風

▶やはり地球温暖化の影響でしょうか。夏の初め頃まで姿を見せていたスズメたちが来なくなり、代わりに、これまで来訪が不定期だったシジュウカラのつがいが朝の決まった時間帯に飛来してパンくずをついばんでいます。

気がかりなのは、例年やって来るヒヨドリたち。庭にある彼らの好物の柿の実は、夏場にポタポタ落ちましたが、まだ半数は枝にしがみついて実りの秋を彩っております。エサあるから、今年も来いよ~

▶日本列島改造論やロッキード事件でおなじみの田中角栄さん。映画の試写会で淀川長治さんが、どんな映画が好きかと聞くと「『哀愁』が好きで、4回は見た」と答えたとか。へえ~、あの角さんが、ヴィヴィアン・リーに恋していたとはねえ。

これ、最近読んだ淀川長治著「生死半半」で得た話ですが、本自体は1995年発行の図書館除籍本。ほかに「映画を見ると得をする」(池波正太郎著・昭和62年発行)も並行して読んでいますが、古本・廃棄本なれど、いつまでも枯れない知識や話題の妙がありますね。

それでは、皆さん、お元気で~。